

## 垣間見た中国の音楽産業とポピュラー音楽

井上 貴子

2001年9月2日から14日まで約2週間、「南アジアにおける「国民国家」システムの変容—中国との比較—」という研究目的で中華人民共和国に調査に出かけた。南アジア専門のせいもあってか、休みとなるとインドに行くことが多く、これまで、返還前の香港と台湾に短期の観光で出かけたことはあったが、本格的に中華人民共和国を訪れたのは今回がはじめてである。短期間で多くの地域を訪問する強行日程であったが、各地ではできる限り時間をみつけて、街中のレコード店にでかけ、スタンドでポピュラー音楽雑誌を購入し、テレビの音楽番組をチェックした。それによって、マスメディアと音楽産業の現状、及びポピュラー音楽の全体的な動向の把握に努めた。

アジアの音楽産業において、70年代から国際問題になっているのが著作権である。カセット・テープの発達によって、違法コピーされた海賊盤が市場に出回り、その割合は各地で9割にも達するようになった。さらに、CD時代に入るとプレス工場の余剰生産力が違法コピーの温床となり、海賊盤問題は加速度的に悪化した。最初に訪れた上海の街角の雑誌スタンドで、早速X JAPANのYOSHIKIが表紙になった『界音』という、VCDとステッカーの付録がついた雑誌を見つけた。この雑誌は、いわゆ

る日本のヴィジュアル系バンドのファンジンで、VCDにはGacktのライブが収録されている。写真なども含めて、どうみてもネット上あるいは日本の雑誌から拝借したもので、著作権無視は明らかである。西寧のマーケットでは、小さなレコード屋の店先から、沢田研二の「時の過ぎゆくままに」のメロディーに別の歌詞をつけた曲が流れてきた。店員に尋ねてみると、今流行っているのだという。これは日本の昔のヒット曲だというと、とても信じられないといった顔をしていた。香港のHMVに行ってみて驚いたのは、CD価格が、それまで各地で訪れた街角の小さなショップの5倍にも達していたことである。ためしに、明らかに海賊盤専門にみえるインド系ショップで、8月にインド国内でロードショー公開されたばかりの映画のVCDがないかどうか聞いてみた。するとすべて揃っているではな



写真 西寧の市場のCD店（2001年夏）

いか。現在、インドでは取締りが厳しくなっているため、正規品を扱う大手のショップでは公開後半年程度はたたないとVCDは販売されない。どうやら、著作権問題はいっこうに解決していないようである。

この問題に関して言えば、インドも80年代までは似たような状態であったが、91年の本格的な経済開放以降、10億人の巨大市場に目をつけたユニヴァーサル、ワーナー、SEM、BMG、EMIのグローバル5大レーベルが進出し、取締りを強化した結果、現在では海賊盤の割合は3割程度まで減少している。欧米ヒット曲のパクリはまだまだ多いが、大手レコード会社は協力して海賊盤追放を行っており、アーティストの間でも著作権意識が高まっていることはまちがいない。香港には、70年代に国際レコード産業連盟IFPIの事務所が設置されて、海賊盤規制が強化されたため、80年代までに正規品の売上が20倍以上の伸びを示した。

一方、中国・台湾・ロシアは、海賊盤CD生産の中心地であった。これらの国々では近年ようやく取締りがされるようになり、生産地は、次第に周辺諸国や東欧方面に移行しつつあるというが、今後、インターネットによる音楽配信がさかんになると、この問題はさらに複雑かつ巧妙になりそうである。

80年代末から90年代前半にかけて、「ワールド・ミュージック」と呼ばれる音楽のブームがあった。この言葉自体は、音楽学分野において半世紀も前に用いられたことがあったが、このブームの特徴は、西欧のポピュラー音楽と非西欧のポピュラー音楽（ポピュラー音楽とは言えないものも一部含まれてはいるが）を同じ土俵でとりあげること、すなわち文化相対主義的な視点に基づいたものである。これによって、それまでほとんど知られていなかったアフリカ、アジア、ラテン・アメリカ諸国のポピ



写真 中国で購入したCD及びVCDのジャケット（2001年夏）

ュラー音楽が、西欧や日本のマーケットに登場することとなった。

中国のポピュラー音楽として最も注目されたのが北京ロックである。ロック歌手崔健の「一無所有」は、1989年、天安門に集う学生たちのテーマ・ソングとなった。彼は、天安門広場で歌ったことによって当局からにらまれ、その後活動の拠点を香港に移すこととなった。ロックが北京を中心に若者の間で支持され始めたのは、80年代後半になってからである。「ブルジョア腐敗文化の精神汚染」とみなされたロックに「体制への抵抗」をみた若者たちは、当局の目をかいくぐって放送されるラジオ番組をチェックし、ロック・コンサートを企画した。私が北京ロックをはじめて聞いたのも89年だったと思う。荒削りで気迫あるサウンドがものすごく新鮮で、すっかり虜になってしまったことを覚えている。こうして、北京ロックは欧米や日本の音楽ファンの目にとまり、ワールド・ミュージックのブームに乗って海外公演も行なわれるようになっていった。しかし、ブームが去ってしまうと、急速に忘れられていった感がある。

あれから10年以上が経過したわけだが、その後北京ロックはどうなったのだろうか。まず、当時人気のあった崔健、唐朝、黒豹などのCDを探し、今も北京ロックは健在かどうか調べてみようと思った。蘭州の街角のショップを仕切る若い男性はロック・ファンだった。私が当時の人気バンド名を口にすると、彼は「メタリカ知ってるか、ファンなんだ」と、急に話にのってきた。彼のオススメが陳屍というメタル・バンドである。このバンドのCDは成都のレーベルから出ていて北京というわけではないが、

唐朝のようなバンドのヘヴィなサウンドを受け継いでいる。また、「ロックの10年」といったオムニバス・アルバムも多数発売されていた。中国に来る前、現在、北京ではパンク、上海ではクラブ・ミュージックが流行していると聞いていたが、購入した北京ロックのVCDのラインアップにはやはりパンクが圧倒的に多く、バンドの質も非常に高い。日本のバンドよりも、音楽的にも気迫的にも上をいっていると思った。帰国してから、中国のポピュラー音楽に詳しい友人にこの話をしてみると、実は日本でも北京のパンク・バンドに注目している若いファンが増えているのだそうだ。

アジアでは、中華圏を中心に、ポピュラー音楽マーケットは国境を越えてますます密接に結び付くようになってきている。日本のポピュラー音楽のアジア進出は、ワールド・ミュージックのブームの頃から盛んになっていったが、近年ではこれに韓国が加わるようになった。2001年には北京で、韓国の人気ヒップホップ・グループH.O.T（2001年に解散）のコンサートが開催され、そのVCDも発売されていた。H.O.TのVCDを見て思ったのは、日本のヒップホップ・シーンが本場アメリカのストリートを模倣する傾向が強いのに対し、H.O.Tは様々な要素を解体した上でもっと大胆に組み直していることである。つまり、ダンスと音楽はヒップホップをポップにしたものであるとあってよいが、ルックスの方は首から上がGLAY、衣装がジャニーズなのである。ヒップホップの3大要素は、MCとブレイクダンスとグラフィティなのだから、ルックスはどうあろうとかまわないということか。日本のヒップホップ・グループなら絶

対にやらないようなことを平然とやりつつ、自分たちはヒップホップをやっていると堂々と公言している。しかも、グルーヴ感は圧倒的にまさっている。90年代、アメリカナイゼーションによって変化を蒙った日本の大衆文化が、アジアで流通し、現地の文化に影響を及ぼすジャパナイゼーションと呼ばれる現象が注目されるようになった。しかし、近年の状況を見ていると、欧米・日本・アジアの文化のハイブリッド化については、もっと精密な議論が必要だと思われる。

中国のMTV番組をみていて最も目についたのが、必ず字幕がつくことであった。中国は大国であり、同じ文字を用いてつぶっているにもかかわらず、各地で発音が異なるため、字幕は必須なのであろう。耳で聴きとる歌詞ではなく、字幕で読み取る歌詞を通じて音楽を楽しむというあり方が、結局のところ、

中華圏におけるポピュラー音楽のグローバル化をかえって容易にしていると考えられる。MTVでは、浜崎あゆみの日本語の歌に中国語の字幕がついていたが、ミニモニ（たぶん）は中国語で歌っていた。もちろん字幕付である。すなわち、中国人と顔が似ている日本や韓国の歌手が何語で歌おうと、どうせ広東語と北京語では発音が異なるので、字幕がつけば同じことなのである。

短期間の中国旅行は、私にポピュラー音楽に関する新しい発見を多くもたらしてくれた。もう帰国という矢先に起こったのが、アメリカの同時多発テロ事件だった。香港のスタンドに並んだ雑誌の「世界大戦一触即発」「絶世大災難」といった文字をみながら、国境を越えるポピュラー音楽がグローバル化の明るい側面であるとしたら、この事件は暗く深刻な側面を表している、陰鬱な気分させられたのであった。